

長野市中心市街地における土地利用と街路ネットワークからみた 歩行回遊性の評価

令和2年2月 杉本 陽一

要旨

目的

近年、世界では車中心から人間中心の空間へと都市を再構築し、ウォーカブルな空間によって賑わいを演出する動きがみられるようになった。日本でも、東京や大阪といった大都市では、公共交通が発達し、自動車と切り離されたまちづくりが展開されつつある。しかし、地方都市では依然として自動車依存社会であり、長野市も例外ではない。そこで本研究では、新たにウォーカブル推進都市に指定された長野市を対象に、土地利用と街路ネットワークから歩行回遊性の評価を行い、今後の地域の賑わいづくりの発見につながる知見を得ることを目的とした。

方法

長野市が公開する共用空間データを用いて、街路ネットワークおよび建物のポリゴンデータを作成し、GISおよび現地調査により建物に属性を与えた。まず、『Urban Network Analysis』（以下、UNA）により、街路ネットワークの中心性指標を解析し、都市の特徴を分析するとともに、歩行回遊性の評価を行った。次に、UNAで明らかにした結果に基づいて、Isovist（可視領域）分析を行い、歩行者の空間体験および景観的特徴を考察した。そして、今後のまちづくりの検討を行った。

結論

UNAの解析から、全ての中心性指標において高い値を示した場所を確認した。これらを複雑で多様な賑わいを生み出すポテンシャルを持った「マルチプルな場所」として定義し、具体的に3箇所示すことができた。次に、Isovist分析では、「マルチプルな場所」を可視領域の観点から視覚的に考察することで、どのように整備すべきかを検討し、方向性を示すことができた。さらに、善光寺の表参道である中央通りに対して、俗世的な賑わいを演出できる可能性を持った「裏通り」の存在を明らかにし、今後のまちづくりの方向性として、一つの可能性を提示することができた。国土交通省がウォーカブル推進都市として意欲的な都市を募集したように、今後のまちづくりにおいて、歩行者の移動を前提とした賑わいの演出の重要性は高まっている。本研究では、長野市を舞台にウォーカブルなまちづくりの可能性を示すことができた。

指導教員 藤居 良夫 准教授